里見八犬傳

第八輯　巻七

709
45

遠 13
門
號 709
巻 45

明治三六年
十月九日
購求

南總里見八犬傳第八輯巻之六

東都　曲亭主人編次

第八十五回

志を傾けて夏行四賢を留む
夢を占して重戸讖兆を説く

再説夏行有種们、四犬士既に證據を取て兎角伸恥を雪ぐ。智辨勇敢飽くまで
譴懲されて共侶よ羞て頭を低てをり登時大村大角、道節を威伏せられて。堤の下ふ退
聚ひ、夏行の從僕们よりも對ひに招ぎて若し衆人這盜賊を招道の趣、皆推並て听つ
らん嚮ふ這野良平が離邑を破て逃し折認得し小廝あり。と欲ずあれ件の小廝も這里ふ
来てその一隊まある。あくべ找て近着て這奴を捉よ。那賊を欲るゝ欲ずゝ分明ならば
そ快々来よ。いそがせば衆人、二個の主を保質ふ食はれる勢ひ推辞べらもあらばれば大家斉一
応と回て一個の小廝をを探りて得る吉郎折盜賊を捉せ、和郎るふを安く生よと日日生ふ

指る。得吉ハ困じ果て頭を撈ながら逡巡ゆくを。速やに立も出難しと衆人聴むて推出れまそく。却已べくもあらざれバ。持る棒をうち捨て。おそるおそる大角の身邊に衽を近着て細めかれる両個の賊を左さま右さまとなんで刀禰さま郷高ふ小可が廁より出る折正可まゑる盗児ハ是這奴らそれとのひやく野良平ふ指させバ大角ハさぞと頷きて。介らバ汝ふる不用事あり両個の賊を成るべしとのられて得吉固辞ふ由なく。信乃ふ代りて野良平们ふ索を會らく成ぬなり。恁而亦大角ハ。夏行ふうち對ひ。氷垣老人今這小厮が云つるよしを听ず哉。河太郎と野良平が招道分明ふと云ども。這盗児を認得る。小厮あるを證えしまえせて暗合せりけれバなほ疑はくへしめやあるらんと思ふふよりて面前則ち這小厮をも糾したり。恁ても惑ひの解ぬとならバ又道節も舊の水際ふ退迮歩ふ夏行有種ふうち對ひ。頑愚の老人昏智の拄伎さへそハ腥の洩れけふ俺義兄弟犬飼ハ男士なれども奴ふ乗して人を害せずことを欲せず況這大村ハ料ずも二賊を獲て。和主们が疑ひを解しあるを鉄おさへ折ら和主们主従が這所ふ來ぬするまで及びて。縛

恁々と説示して二賊をいはせんとのひしかど然なければ和主们が飽まで君子を虐げる行状を知るのミふして犬飼犬村二兄弟の恥を雪むふ足らず。懲して思ひ知せんと思ひよけれバ其の議を否ふてかくの如くふ計りたり。疑心暗鬼を生ずと云けん世の常言ふ違ふことなく。疑似の迷ひを解けども悟らずその身の破滅ふ及ぶといと愚なる所行ふあらずや。恁ても先非を悔ずそやよしある欽甚麼ぞやと詞徐ふ責問れる夏行と有種ハいよいよ羞て今さらふ後悔の外ふあずける。ぞ中ふ夏行ハ嗟嘆ふ堪ずと粛然と四大士をうち仰ぎて某暗愚の思慮足らず女児重戸の意見を用ひず漫ふ二君子を寃げたる其罪実ふ萬死ふ當ります。非如目今一死を促ふ縛頸を戮ほるとも自業自得ふ候へバ怨ハあらじ。あれど重戸が忠恕惻隠の心ふ顧て婿有種を許しあるで身後の幸ひ冥府も後安く候べし。這義を海容あれかしと憑むは残有種推禁めてそれよ亦思ひかけなきことと諸君願よへ听ゑ甚ふ初より二君の囚れぬひしと知ぜ。那盗児们を逞難て日昔て宿所ふかへりし折養父が二君逐電の縡を顛末箇様々々と報

ふかよりて共侶ふ這里へ趕蒐來つる虚実を糾さま暇もあらず。綽倉坐ふ起るとに、
ども俱ふ惴り。這身の不覚罪と免る所を。只某が首と刎て親と許さをのひ給。と
唧語がまし孝烈慈愛ふ死と爭ふ老已ざり。と四犬士弃一感ずる中ふ大角現ふ歎
賞あ、左見右見て。氷垣老人落魄生鄙ふのひしと雪ざる狡俺ども素より害心なし。
過て改るふ憚ることなれとある。聖教を忘ずも。先非を悔り。急状の趣を雪ぐ。俺ども
亦然る。今ぢく死活を論せずと詞等く慰めて夏約と有種を被る素を解捨て分捕
者ふ為両刀を誘て返。與ふ夏約も有種もひく羞て左右を取ら共侶ふ跪て某
們率ふ寛仁大度の意を示されて首を續。ることは再生の洪恩なるを四君子ふ素
是何州の豪傑を願ふ本質高姓と具る知らまを。子孫を偕て後の世を永く武
徳を仰ぐべし。と名告らせまひと請求ると両三度真実婦伏の心操亦他事もなく
えかべ欽ふ現八大角俱ふ莞爾とうち笑て遠愛を懺悔の誠心衍を知るものの誰も

かくてあるべし。身不肖なれども大士の一人甘ふ下野ふ赤岩の人氏也。義ふ仗て故郷を去
る。大村大角礼儀を名告れば亦現八も。俺ふ下總許我の退糧人犬飼現八信道と世号
せ。偖て信乃道節も共侶ふ武蔵豊嶋の大塚人大塚信乃成孝同國煉馬平左
衛門信盛主の残党黒ふ然るのあると知られる。大山道節忠嗣過世ふ結び義兄弟ふ
去の外ふ三名あり。相別れより往方を知られば。年来諸國を巡り甲斐ふ今宵料らず犬飼犬
村元兄弟ふ環あうと。そもそもふ沿ると名告るをうち笑く夏約有種驚ふ目を合と原来
五六年前ふ兄這頭ふ風声隠れるり。那大塚より程近ふ庚申塚の法場を要ふ隨ふ闘
志。同盟冤枉の罪人を拯ふ為ふ。
合笑頷ふ。問るく如く俺ども拯ふる義兄弟ふ大川荘助義任と喚做を一箇の俊傑
ふ。這外ふ大田大江の三大士と俱ふ七名忠信孝義も伯仲を優劣の為ふ報れべ
いふく驚ふ感ず。夏約ふ恭ふく道節より對て。犬山賢君某が女婿有種ふ煉馬の

文溪堂藏

舎兄豊嶋刑部左衛門尉信盛主に仕へまつるものにそはあれ。ときへバ亦有種も。道節にうち對ひて。烏許がましく候へども某が父落鮎岩水員種と喚れしもの。則豊嶋の家臣にて二親を喪ひて世に去りけれバ某も亦総角より信盛主に使れて童子扈従で仕へしに豊嶋の一族滅亡の折。憖に軀を漏されて身を措く所なかりしに類父氷垣残三夏行が妻ハ某が為に伯母なりけれバ竊に這地に落留りてその女児を妻せられ義父と稱へ義子と喚れて今日に及べるを今は和君ハ豊嶋の一族煉馬の旧臣にてをはせしとあるに初て教諭せられて懐旧の情太かれども先考大山道策大人さへ江五田池袋の戦ひに比類なき挊して陣死をしたまへる吾輩の趣も侍りぬべしかれども故なれバ相譚ん詞もなかりしに君が家代與に舊縁あらせし賢者に因を結びて這身に光を増まなん歟今より諸君に事なれバ一臂の力を盡しまいらせん要目を見るのみかハ肝胆を吐き素生を演くる世に隔なく告したれバ道節も亦怡悦て勝に這年来義兄弟を索て諸国を偏歴りし於豊嶋煉馬の残党に名告あはんとてゆくりなく憶ざる和殿の素生を告て故人に遇ぬる心地なる。と憑しく。ひとその詫びと舒るに。信乃現八大角も共侶に稱賛して怨讐還て知已となる世ハ塞翁が馬。吉凶の寔に愛たしと。笑をもて一奇偶を祝しける。且て現八ハ又夏行にうち對ひて。御身は衆人の云ヘバ知らぬ和殿ハ這頭三郷を開發の功ありといへども。其の氏も定かなくほがれど。問まく夏行ぎさハ其原ハ丹治黨にて弱冠の比鎌倉の管領持氏朝臣に仕へたり然れバ持氏御滅亡の後春王安王両公達のおん與に結城の城に盾籠りて武蔵の人氏大塚匠作三戌と共侶に城の一方を戍りしに両公達御武運開せ給ハで諸将の防禦画餅となりて落城に及びし日某ハ慫に寄隊の囲を殺脱て遠く這地に落留り地頭穂北氏に身を寓せて微なる。なりしにし結城より某が隊に隷る士卒千百名許。某が迹を慕ひて倶に這地に聚合たり当時穂北梅田柳原の三郷ハ年来の兵火に荒れて一歩を耕べきものも多く豊恨商離散なりしかバ地頭も棄て召かへず妻子眷属を携つ。愁訴の為京師に赴きし室町殿に仕へまつりし応仁の乱に及りて戦死しつと聞えつ。その妻子ハ且て這地へ還らく

文溪堂藏

草野を墾たり。當日某を落人ども。力田を薦め地を闢しと。倶る心力を盡せしが年々水旱の患あり。利なるこの大かさまられば人咸某を德とし。推て三郷の長とせり。是より先に某の舊地頭穂北氏の徒弟女の獨遺されて這地に在りし。娶りて女兒を産せしのみ。不幸にして男兒あらず。妻に近屬身まりの兒。小程に豊嶋の落人落魄餘之七有種に亡妻の姪に志。武勇の壯佼なるを。金藏措くと両三年。その幼状を試るに心ざま勇悍にして人の尻馬に乘るのみならず。よく耕農に勤しと。資助とするに勘うるに女壻養嗣に志しに。那豊嶋の落人ども。有種のうへを偽りて身を寓せ。既に立まして。八十名に及びしが。又人々田地を取せて。敏系昌都會に寄らんとす。徳れば某が結城を落て。穂北氏に寓居せしより。今に至て四十年。徳而三郷の長に做りしに。十四年を歴るに。報れば現人道節に倶に嘗なりし。鳴呼。是も亦一奇偶。永垣老人の知るを。俺這兄弟大塚生に和殿が共に結城の城の一方を成さんとの。大塚匠作一成の獨子き

いぞ。とのまに夏の胆を洗しと。原来亦是舊縁あり。嘉吉某結城籠城に比某年尚弱なり。されば匠作主に指南せられて。師弟のかりを做しに。那人は戦歿しと。忠誠武名を世に知れ。某は存命して田舍翁と做しに。識者の為に羨るに。大塚主は何ぞ。故に爺々公の時より家系を捐て。他姓を冒すにあらざると。同れて信乃は愀然と目を瞋らし。嗟嘆きしの疑ひあるを。元父番作に。ヨヨと病ふよりて。故郷を退隠せしに。妻大塚基六の奸曲不義を忌とし。大塚の大の字に一點を加へ。他姓を冒したるに。是より俺身に及ぶまで。大塚と。家號に。偶然に出るとは。是宿因の致所。易々縁故あり。某甲斐に旅宿せし折。戚に舊縁あり。四六城木工作と。喚ばるるに。今又に六父の舊友氷垣の翁に値遇せしに。思ひ存ずる。幸ひに。世のつねならぬ。感悦の色ありとて。絮に夏の有種某が衣食足て這地に年を経るのみ。親類なるに。大塚大山二君子の舊故を辱せるに。大飼大村自餘の諸君も。介意

なうんとせしを願しく思ハれ侍れバ身の程をしらずに似たれども某們も武藝を嗜ことハ強
敵におそれハへども後れを取ることなし。今宵犬村犬飼の二君子を刺んとせし折その胸前より
忽然と光を放ち眼を射て衝出たる鏡の狂ひかバ些も掟を攪ることなるべく大刀を拔ぬ二君の
為に組伏られしハ武藝力量その差ありて勝負分明なるにあらず故ある事歟然かと思ひまゐら
するくくいふと疑惑ひとつく向けるに信乃道節ハ慰めて某們がうちとけし所今宵和殿們親子の
武藝の疎なるにハあらねども犬飼ハ二階松の高弟にて緝捕の敵ニーと稱せらるゝ犬村生の
修煉の程ハ今宵初て知るのミハまだその師を詳にせざれど是も亦犬飼に伯仲す武藝
且俺們七犬士ハ感得の靈玉あるを各々懐に藏めたり是等の故歟と説諭せバ百夏行と有
種ハ亦復驚き感服して原来諸君ハ尋常ならぬ勇士にておはしけり既にして夜ハ深たり宿
所へ伴ひまゐらせんとのミにて衆僕をもて君們ハ三四名なく宿所へ公の由宛て听つるよしを重
戸に報て賓客儲をせよとのミ快く告知ねと急せバ荘の内と荘校們も三四名身を起して穩

北を殺て走りけり。登時現八大角ハ又夏行にうち對ひて義兄弟の資助によりて生拘られたる這
二賊ハ地方の法度もあるべけれバ和殿の隨意に計ひねといへバ夏行ハ異議もなく貴く教に趣承
ける地方に稀なる兇賊を輒く擒捕られしハ是四君子の武徳に憑るのミ。俺ハ郷の毋のミならで患を
鋤き害を除く。鄰郡までの慶祥ならん。此の如き草賊ハ速に首を刎て彼此人に示すべき。權且
等せぬにいねと応て躯て有種にあてらるゝ共侶に河太郎野良平にうち對ひ罪を責て倶に
刀を拔閃めかせ有種ハ河太郎が首を礑と斬落せバ夏行ハ野良平が首を刎き刀を斂め
却得が吉に分付て船の板子を拿寄せて腰なる墨斗の筆をもて板子に背へ件々と三賊の
罪科を記着て又荘校們を召よせて箇樣々々と分付れバ荘校們ハ走り集て二箇の首級を水
際なる樹枝に梟並べ、板子の札ハその樹の幹へ索をもて括着けり。四犬士ハ夏行の決断に
礙滞なく且神速の計ひを老功ありと感じける。かくて果て夏行有種ハ四犬士と相倶に穏
北へ帰り程に三十餘名の従類ハ夏行有種の鎗を携或ハ船笥を舁で鎌又とるあ

共に一勝ふして荷擔ふもあり又續松を乗もあり。先ず立後に跟に陸續として従ひけり。
然而信乃の夏蘭て信乃道節現八大角は氷垣親子に伴れて穂北の宿所に来ればぐ
家僕仁玄関に出迎て客房に案内す。蘇待能大丸と夏彩有種公衣裳を
更め出て来る。準備の夜飯と西大士に差わるとせ程ふ。時ふ過て客も主も坐と実
て辞して枕に就ける。却詰朝夏彩の荘客仁は吩咐て那賊船を破却さ。這日宿所に
酒宴を儲て四大士を待る。野蔬海錯数を盡て田舎に稀なる調理なり。四大士を
相縛へて盃を受巡らしける。その時世智仁小才二人の足の撲傷を癒れど四大士の辞の趣
偽はり駭怕れて有種に就て現八大角に昨日の無礼を陪話す。現八大角に今はふ
島許に居ては。這方へ召せ。と世智仁と小才二と席末に招ぜ
その痛所を問慰め。仁意ふ為に共に不平と取ざるけれ。世智仁小才二秋び稟て初く安
心せ。信乃道節も是迄の情由を聞ふ初て知りて那計畧を誉め。かば大家出と実び

無ふて帰ふ。然ば現八大角は這折とて夏彩に車戸ゲ人を知るオあり。四囲の
内に極ませ。徳と稱恩と感じ。いざ一トび面前に這秋びを演ず。欲ず餘之七主も共招ふ
宜く待へ。と憑ふ。夏彩合笑て犬飼犬村二君子の拙女を寡美に分ふ過ず勿論他人
自実に親に不孝の彩こく良人に不遜の事もあ。母親の世と去ず。
のこ這地の字を樗野と嘆。故市非のあふ似れど何でよく虚実を辨ず。人を知るのオあん
や。然ると昨日に他一人犬飼犬村二君子に那賊ずと鑒定く。某を諫めふ聴るべ。
ければ謀りて落まわせ。その智慧も亦廣大也。日蘭に十倍ずけり故ある支秋あ。
汝ず。とのへば有種真実立てその左まれ右もあれ車戸を這里に来せ。姑く等せ。
ば奥に退けり。と侯程ふ道節に夏彩ふ。ち對ひて今愛の慈善賢明犬飼犬村の極
まる那件の趣にその崖畧を少知りたるヨ。くるべ善行方便人食感佩せ。
今試ふその可否を論せんふ聊破隙ふ坐奥に這美を。ば教とい夏彩ふ。

夏行有種
四大士を
歓待せる
信乃
現八
大角

道節
毛野
荒芽山
犬坂

笑てそハ何ぞ欲知らねども願ハ教ゆかと。心で膝を找るゆゑ道節肩を筋ゆ把て恁いで善を喜せて猶且人ゆ備らんことを求るゆ似れども。今愛の初より犬村大飼の賊ゆ成ることを知らぬ。世の人の是及ばぬ所を知やこゝる故ゆ親ゆ隠して放遣りゆゑ。ハ寃屈の與ゆ人を殺して後の崇のあらせじと思ひ。誠心を是も亦世の人の及ざる所を然とも昨宵和殿親子を犬飼犬村を趕逐て千住河原ゆ来ゆゑ。折犬飼犬村甘ゆ只那怨を復さんを和殿親子を許ゆ。こゝ。従類まくも屠りゆゑ。是今愛の慈悲善行ハ還てその身の仇ゆと親を損ひ良人を害ゆる。衍心と為ることを何ハせん。故ゆ知命者ハ仁も亦做ことを勿れ好事もゆゑ。如ざとハ。現仁を做さんと欲して危殃ゆあるゆ。宋襄の敗軍微生の橋梁仁を行ハ信を守れどその機変を知ざる故ゆ遂ゆ身を殺も禍ゆ。好事ハ吉事善事をゆゑ。事ゆれば好事ゆ。仁を做さんと欲するより不仁を做さんと慎むを如ざ好事ゆれと願ハんよりゆ事ゆゑ。仁も亦不仁も亦好事も亦ゆ事もゆゑ名つけて為とゆ這義を蘇東坡も亦

宋の襄王敵の河を渉まとゝ敗軍せしを敗軍せしを

又微生が女子と約束ゆゑ橋ならぬ橋を渡りて期を守りしを

事ハ静坐とハ。恁りけれども大飼犬村及某甘ゆ至るまで和殿を害ゆる心ゆ。恐雖言還て知己とゆて欲ひと書ゆと主も客も共ゆ免れるゆゑ。膝拍鳴て論ゆを信乃ハ急ゆ推禁めて犬山和殿の辨論ハ是刑名家の旨ゆ。今戦國の人意ゆハ。俺ありよりハ然らば。昨主人の今愛の科ゆ者を衍て殺さば遂ゆ出宗を禀て親ハ孫の與ゆも宜かゝと思ハれハ勉て仁を做せゆゑ是その苦計ハ他人の與ゆ。意ハ親と良人の與ハ恁れば他人ゆ厚くして親ゆ薄しとハ。その做を所公ゆゑ親ゆ叛くゆ似ざとゝもよくその親の衍心を補ふ旨ハ是孝ゆ孝ゆ義ゆ。慈悲廣大の誠を以二犬士を放遣りゆゑ。犬村大飼甘ゆ恩を感て德を吉して主人を害ゆる心ゆ。恥を雪めゆゑるゆハ則賢女の致を所。天鑒虚かゝるゆゑ善ゆ善の報ひゆ。悪ゆ悪の報ひゆ。宋襄の仁微生の信と日と同くして語ゆ。然ハ出ゆゑと。徐ろゆ理義を演ゆる討論ゆ道節耳を傾けて。現ゆれば理ゆ愚論ハ思ハの足らぬ。氷垣主人甘ゆ醉語を意ゆ

宋の襄王敵の河を渉まとゝ敗軍せしを

又微生が女子と約束ゆゑ橋ならぬ橋を渡りて期を守りしを

仔
機ゐると陪語々呵々とうち笑へば現八も大角も信乃が議論を喜ーたるそゞ中ゐ夏幼を
聆果て貌を改め信乃道節ゐうち対ひて大山主の宏論ゐうち守く所分明そのゐうゐじと
ゐ〻ゐ大塚主ゐうち超て道理を聲ーゆゐ〻ゐる。妙論耳新ゆそ。乞と老学ゐゐゐゐ〻。実ゐ
感服つゐゐゐゐと稱て亦復四犬士ゐ不並を薦めけゐ浩然ゐ主人の女児重戸ハ衣裳を更めそ
良人ゐ引れてゐう殺くゐ容房ゐ出て来ゐければ現八大角ハ遽ーく席を避け相迎へてゐう落點
生の御内室良善の御志念屈して某们幸ひゐ老大人御親子と友垣を結ぶと皆是賢
婦人の貺ゐう最歓ーくけとへへ重戸ハ額をつゐて浅ゐ女子の計ひも善来さゆゐ刀祢遊ゐ海
成を御心廣けれ怨を解て風波の立ゐゐゐゐけゐ固坐ハ千金ゐ三ゐ〻ゐ〻れ素より田舍の
ゐ〻れば歎待態の疎ゐゐゐゐる東西も伝ゐれど父も丈夫も日を経るまでゐ只ゐん宿をせまく
ほーと稟ゐうゐ外ハ伝ゐゐゐゐ。とゐゐうちゐく信乃道節も共ゐ名を告ゐ對面そきのゐの計
ひと誉めーゐ夏幼ハ笑ーけゐ女児を身邊ーに侍らゐ。重戸听ね賓客遊ゐ伝ハ人を知る才

ありとて大く誉さゐゐひかども親ゐゐゐ年来日屬伝ゐ然ゐゐの眼力ゐゐゐゐゐゐゐゐを
那禰襟の片袖の明証ゐゐゐ退けて犬村大飼三君子を那賊ゐゐと堅定めハ故ゐゐ欲
ゐゐゐゐと問れて重戸ハ羞白ゐゐる頭を擡げ衣領掻拭て疑ひハ理ゐ奴ゐゐとゐ初ゐ
那人さゐの賊ゐゐゐを知るべゐ伝ゐゐと隔昨日の曉ゐゐと美ーゐ神女の枕ゐゐ立せ玉ひゐ奴を
吸て宣ゐゐ羽立未申の刻及ゐ箇様々々の旅客三名伝の親ゐ疑れゐ脱ゐゐゐ犬尼あん。
他们ハ決して犯人ゐゐゐ俺與ゐ過せゐ志氣潔白の義士ゐそゐゐ義を結び兄弟たる
ゐの他们と共ゐハ名ゐゐ這们ゐ尼難ゐ折毎ゐ俺影ゐ立形ゐ添ゐて救ゐゐと言ゐーゐ。
ゐゐゐゐ羽ゐ尼難ゐ疑似の一種ゐゐゐゐゐゐゐゐ伝先よく這意を汲ゐ面を
犯ー親を諫ゆそ。身聽れゐハ便直ゐゐく他们ゐ放遣ゐれゐ。悠計ゐらゐ憂を轉て歡び
と做ゐ福ひゐゐん狀ゐを惑ゐて共ゐ狐疑せハ福還て禍とゐゐ瞬く間ゐて親ゐ良人ゐ非
命ゐ死ん奴謹ゆよ忘ゐゐと妙音高く示ーゆゐとゐうハ夢ハ覚ゐゐ覚ての後ゐ胸裏ゐ

宍動して平き[illegible]怪くも惶さふ心ふ秘てあらけるふ果しくきのふ盜見を穿鑿事猛ふ起りて嬉やく面個の刀祢達。這里ふ内れ[illegible]ぶ原来正夢ぶりて心ふ悟りて乖妻時もあらん性起らるのひ[illegible]身を諫て詞を盡ぶ[illegible]ふ果敢ふ[illegible]と告禀さば只叱らるるのふ[illegible]聽れぞ[illegible]べいふ[illegible]ふ憂とあんと思へいのいでて夢ふ神の教ふ儘しを示現ふ達ふ昨宵の夏げの周坐も皆是神の神謨ふ[illegible]知ぶ[illegible]せば倒ふ[illegible]賢女ふ才女ふと宣ふ[illegible]を恥げれ[illegible]ふ驚く夏行有種原来然るべ[illegible]ふ欠奇ふ[illegible]ふ感歎む声ふ[illegible]ふ先ふ四大士ふ[illegible]ふ目と目とふ[illegible]ふ倶ふ悟りてふの意を隱さば正ふ是伏姫上の神靈擁護ふ疑ひ[illegible]ふ則夏ふ有種軍戸ふ那姫上の夏の顛末箇様々々と説示して伏姫上ふ俺ふ過世の母ふ[illegible]ふ恩る霊驗ふ[illegible]ふ今ふ[illegible]ふ犬塚ふ許我と行徳猿石の窮泥又大川ふ大塚ふ軍木籔上ふ誣られ[illegible]ふ又道節ふ五大士の芒芽山ふ[illegible]ふ萬死ふ生て一生を[illegible]ふ[illegible]ふ現ふ大角ふ赤岩返壁の大厄難ふ皆是那姫上の影ふ立形ふ添ふ。護

ふ[illegible]ふ冥助ふ[illegible]ふ神ふ[illegible]ふ自身ふ[illegible]ふ悟らで空ふ過ぎたふと各々念ふ[illegible]ふ乖妻時合堂ふ[illegible]ふ解ふ[illegible]ふ却夏ふ[illegible]ふ夏ふ有種ふ[illegible]ふ滕ふ找むと覚ふ[illegible]ふ驚ふ[illegible]ふ感ふ[illegible]ふ里見殿ふ姫上ふ神霊応驗ふ灼然ふ[illegible]ふ世ふ有ふ[illegible]ふ奇支ふ[illegible]ふ各位ふ幾番ふ危窮ふ厄ふ[illegible]ふ友同士ふ所在ふ索ふ[illegible]ふ亦是ふ[illegible]ふ非ふ[illegible]ふ乖妻時ふ[illegible]ふ賊ふ[illegible]ふ論ぜ[illegible]ふ乖妻時ふ[illegible]ふ安ふ誨ふと叮寧ふ勸解ふ終日相譚けふ歴而郷食饌果ふ四大士ふ次ふ日ふ別ふ告て去んとせ[illegible]ふ夏ふ有種推禁めて[illegible]ふ強顔ふ速ふ[illegible]ふ宣ふ[illegible]ふ復自餘ふ犬士ふ所在ふ索ふ巡らんとふ[illegible]ふ[illegible]ふ限ふ知れ[illegible]ふ旅ふ[illegible]ふ權且這里ふ[illegible]ふ縁ふ[illegible]ふ居ふ[illegible]ふ再會ふ時ふ[illegible]ふ冬ふ赴けば雪ふ犯ふ霜ふ嚙て遥遥けふ路ふ舌ふ[illegible]ふ春ふ逗留ふ[illegible]ふ要ふ[illegible]ふ[illegible]ふ急ふ[illegible]ふ[illegible]ふ詞ふ盡ふ放ふ四

犬士の已ていふるを遂はその意を儘しけり。是より後犬士们の側ふをら折過去方城迷ふ報ずふ道節ハ五ケ年前荒芽山の窮難ありて犬川荘介と共侶ふ四国九州の畫廷まで。偏歴既ふ四稔ふ及び。去歳ハ甲斐の石禾京、大法師の寺院ふ宿して、大井ふ照文ふ名告あり。古文の趣ふ後犬川荘介ハ自餘の犬士を復索んとて石禾を首途ふる。ふの冬信乃が窮泥を道節謀りて極ひしふ。四六城木工作并ふ里見氏五の君濱路姫ふ。遥婦夏引淡雪奈四郎その僕媼内懐内们ふ甲斐の國守武田氏の信乃道節ふ對面ふ。これふより信乃道節ハ武田氏招待の催あるを待知りて。十一月の下浣蟹崎照文ハと共侶ふ濱路姫ふ倶して。毎石禾を立去て。武蔵下總の封彊ふ。墨田河ふ來る道中四谷の原を那奈四郎ハ悪僕媼内ふ傷つけられ信乃を料らず奈四郎を斃ふ果て姫のた輿ふ四六城木工作の死を復せり。ふの日蟹崎照文ハ濱路姫ふ從ひまりて。河を渡りて安房へ赴く。信乃道節ハ荘介を索ふて甲斐ふ在ら

むるふ。鞆の由を告んとて。豫て約束の國郡を那這とうち巡りふ何処ふ在るんのまだ知ふず。今茲ハ奥の會津より。白河を経て下野なる那須二荒山へ向ふ。大法師ふ消息を荘介が帰來るを不日を向んと思ひ。遂ふ這里まで來ふるとふ憂苦難難塊奇ふ過ふ支の物かたりふ現八と大角ハ耳を側て嘆唱を。聞くと約莫一晌許。就中濱路姫の一大奇支ふ胸を淡く。左ふも右ふも俺嵩ハ里見殿ふ宿因ふるとふ。ふ筥節と合ふ如く大山生の女弟と。ふ筥節ハ濱路亡女と五の君と同名なるも亦奇なり。大塚生と合巹の約束を遂ざりける濱路姫ふ。迭代ふ説示を現八を五稔已前荒芽山就て其们ふ人ふ。箇様々々のふ為を。迭代ふ説示を現八を五稔已前荒芽山ふ。危難の折敵の重圍を殺脱て。獨四天士を索ねふ。ふの比行徳ふ赴て小文吾を訪けるふ他ハ故郷ふかるを。曳ふ單節の往方を。竟ふ知るとなるふ。京師ふ赴て旅宿して一稔ふ在りふ。ふ後又岐岨路より下野ふ赴く折荒芽山ふ立寄りて

の。紬緒の甘糟店鶏平の。庚申山の奇異怪談赤岩一角武遠の。寃鬼の海よ
り。返璧至る。柴門を敲く。犬村角太郎の。毒婦船虫蜑
山逆東太縁連の。又現八が赤岩の試穀る角太郎夫婦の窮死。烈女雛衣が自殺ふ
と。礼字の神玉仇を倒して。その良人の危窮を拯。旦現八が豫て謀りし角太郎の淺傷の
鮮血を親の髑髏ふ沃ぎ。親子の證据揭焉。角太郎の惑ひ醒め。妖怪越ふ覺る。
角太郎は穀られ。是より七角太郎と改めて家を售り故郷を離れ。自餘犬士ふ
遇んとて。現八と共伴ふ。偏歷三稔を及びぬ。一大士ふ遇ざりけれ。權旦故郷ふ立かへり。二
親の墓ふ詣。并ぬ亡妻雛衣の三回忌辰。佛支を執行。更ふ行德を赴て。小文吾八今
も在宅ぬ。又現八と共伴ぬ。良這地まで來る。頭より尾まで。現八これを談まで。
大角も亦語を續ぎ。閑談ふ日の暮るを覺ず。說果て。大角の護身囊ふ藏める。那礼
字の玉を取出て。信乃道節に。これを與。又衣領を推開て。左の乳の下より腋に邊ふ

犬士の玉を
そ疵を
及びる。疵さへ這折ぬ。信乃道節ハ皆見る毎ふ共ぬ感嘆の声を斷ず。那折の勢を粤ふ
倩想像れば。現八の義勇。大角の純孝。雛衣の苦節。ゆゆしく那山猫ふまで。皆未曾有の
珍說ぬ。憐むべく哀むべく。驚くべく。歎べ。事情の然ぬ。又今ゆふ。ある心地して節を
拍て稱へり。當下大角又ぬ。甘木が犬飼と。俱ふ舊里ぬ立寄りて。世ふ。妻を。ぬ。續けて
女々しく故郷を草ふ。けん。勇士の本意ふ。ぬ。笑ひ。那雛衣ハ甘木が。
獨女ふて。養父ハ小父。師匠。然ぬ。亡妻雛衣ハ。俺身の與ぬ。ふ。仇を仆せ。大功ぬ
且甘木ハ其比。父の非命を終りて。知らず。變化を仕へ。ふ。大飼主の好意を。父を仇を
妖怪と。擊捕。ぬ。ぬ。旦足ぬ。況養父の洪恩德義ふ。報ひ。義
もあ。ぬ。ぬ。壯園ぬ。護られ。心を恥ぬ。ヨリ。切て。妻の三回忌。故郷を還。菩提を
吊ぐ。養家の與を萬一の恩義ふ答るよりぬ。ふ。犬飼主と。言て。形ぬ。ふ
ぬ。這意を。查。ぬ。と報る詞の不樂。げ。信乃ハ。聞。慰。ぬ。も亦理義ふ

稱へけり。誰かいひしとあるハ、彼異邦なる聖と唱へし禹が洪水を理めし折、六七稔歴ぬる隨に。
己が家の頭を過れども立寄らざりしといふなる、臣たる道を盡せしなり。犬村生ハいまだ仕へ
ざれど、同因果の友あり、とかくして索巡するのミ。進退不定の旅なれバ、非如然る意味あるぞ
とも、我番故郷へ立寄れバとて、忌むに一切なるべし。且犬山を初として、犬飼犬川俺身はさら也、
皆故ありて舊里へ立寄ることなるざるのみ。然れバ年来二親の墓に詣ることも、己ひとり歎く
のミなるに、犬村生ハ異にして、所親に置直酒して別を告げ、公然として舊里を愛みて立去
ことめでたし。是ハ最美しかるべきなりとの余に、道節現八も寔に然りとて応て、信乃が評語に身残不
樂て、且大角の人と為り温順ふして孝義に厚きを亦称るがしとぞ出でゆけり。

第八十六回 道節再復讐を謀る 大巧に妖賊を滅す

復説信乃道節現八大角ハ、主人夏行有種が留ることの懇切なれバ、憶ず逗里に日を
弥累て、秋も過冬も來て十月の中澣になりける。恁而有一日信乃道節ハ、現八大角に
對ひて云ふやう、去歳の冬某們が石禾の指月院を立去りし折、蟇崎十一郎照文に
従ひ來たる雑兵一両名を留め措きし事ある折ハ、相告げよと約束をせられしかども、一ト
たび那処を去りしより、いまだ荘介に環り會ず。且某們ハ国の守武田殿の招きに応せざり
き。然るを今ゆくりなく立かへりて那道場に到らんことハ、影護き所あり。這里より脚力を遣して、荘介が
那寺に環りて処るや否と訪ふべく、并に今番和君們と環會ひたる趣を、大法師に報
まく欲す。這義をいかにおもふかと、いふを現八大角ハ、ひとしく聞て、その義尤宜かるべし。然ハとてあ
人を哭して甲斐へ遣さんまでもなし。某們うち連立て指月院に赴くべし。然すれバ文書の煩
ひなく、大法師に對面して委曲を演るに便よし。且犬川が、かへり來て那処に在らバ倶に
速にかへり來てん。いまだ那処にあらずといふとも、時宜によりて逗留して帰来給ふを俟べし。這義ハ
儘しあらずやといふに、信乃道節ハ欣然と大かたならず、和君們那処へ赴き給はゞ、百事輯にあ

弥倍く意を盡さんと自由をべし。進退隨意なるべと相譚果て却説さて夏の有種が
告げ知らせ夏の有種いよいよ出て。ちらくばに伴當をまわせ。俱して首途なるべくしと現へ大角ハ
共に推辞て從ひ伴當あるべ煩ひ程なかりまつべとその詰早朝と出て申渡略を
投げ出て。放ち熟くる杜士の行装を繕ひ舊の伏ゐる官笠と雨具とを携へ急ぎ
送る夏の有種信乃道節も河原を出で決て分ける足より先に夏の有種ハ幹淨なる
小室に四大士の住居と定めて東西不自由なく息を賜ひ三度の饌も等閑なく。その間ゆゑ
果子を摘め酒を薦る折々ハ有種を侍らんその身も俱に武を講じ兵を論じ慰やる。
その用意親切なく。貳ちろ〳〵ゑ〳〵ハ道節竊に歎く。一日側に人を折有種を喜く
ゆゑ伏ゐれり。ある夜曩に某上もる白井の城の郊外なる寃家扇谷定正に欺詐
寓りて組伏く刺殺して首級を捕りに敵も逆用心あるその真の定正なる池袋の
戰ひに俺君煉馬殿に鏡を鍋る扇谷の家臣ゆく。越杉馳一郎遠安と喚做りのぐ

あり。
有けるに這折に父の仇なる虎一二三宝平を殺し敵を謀
臣田助友に謀られ芦川芽山の危難あり。俺のこと大塚犬川犬飼犬田も敵に當
ちくらく。
ゆゑ。四変ハ俺に。ちろ〳〵今ハ全聚ら且補平の世四郎とその妻音音ハ戰殺ま
けん曳る軍節。生死存亡詳ら〳〵実に君父の讎敵なる那定長を討漏
ちく。恐ふ年を累れども大敵を又ゆふに狙撃ら便りも助く。過せ有ける義兄弟に環り
あて後ハ。ちと思ひ立ちとなる光陰五稔を過ったらまるに今番料らも夫宅に
富居ものこと。扇谷定兵五十子の城に在とゆゑ四五重ま足ら必程なれハ虚実を
覘ふ。易く鬼に便りなく。士兵百名借りの他外出を覘ふ。短兵急に責撃ば
宿望立地に成就せ那大敵を討捕ることを家裏に安房に赴まるべ世に恥る
とあるべ。這義を兼ねるやと思入て相譚ひと有種聞く異議に及ぶ且歎く答
るゆ。盛るる忠義の竟甘をどう今ゆに企及ぶ所なく。ねと安ひ〳〵用いる。

あらべ翼尾ふ所く一臂の力と盡さべ。那定正ハ俺亡君豊嶋殿の與ゆ仇と襲ふ日井多て
あるーゆ。君ぞ武勇の風声を知ざるふあらねども當時俺身い年も壮二十ふ足く及程ふ一点の
定ふ成資ふのまあるーかと復讎言のまあるべと乃べ。今ハ進退一定ーく支筑行
ふ便りあり。且豊嶋の残兵の其ぞ跡を甚稀ぞ。當日這里ふ聚合ーゆ無慮八九十名
あり。皆荘客ふあらぬ。重陣ふ熟ぬるゆ。他門ふ機密と其ふーと復讎言の日ふ從せ
ん。他門も亦亡君の怨と復さんと欲べて從ふべ。某も亦親ふ告く倶ふ定正茂一
箭射ん這美と免さ社ゆ。とのふと道節推林ゆ。そを決と要用と和殿人の後と乃べ
妻子あり養べ。光ぞ倘本意と遂ぜと敵の為ふ戦殺せ。敵を殺ぬ養
家の與ふ不義と為ん。縱本意を遂ぬとも。その後ふ敵ふ知られ。大軍這里へ寄来
るあらば何をもて防ぐ。是災害を送ぬ。速ま疾く和殿ゆその意あらば俺與ふ五十子の
城へ招き誘ふ。虚実を知せあるべ。某も亦折々那里ふ來く覘ん這義ふ儘ーなん

志ハ大義の念慮を轉ーと猶又時と俟んのとふ有種困ー果て。然ぞふ思乃ふ
らべ今ゆふ力及ぬ。俺身ハ必ず止ーく。那荘客ハ機密と徳ん。御心安くあ
と相譚果く退ぬけ。介後又道節ハ信乃ふ件の宿望と箇様々々と告ーかぞ信
の乃ハ听ぞ頭を掉く。その義甚あらぬ。べく是裏ふ和殿ハ白井ふく。君と父と害ーた原
越杉霊門両個の仇を漏さぞ其首ふ獻ゆ捕く。復讎言の義と果せーふあ。ぞ今
ゆ。必ず起と定正王を狙獻ゆんと揣るハ危と支ゆ。約軍陳の常態ふ。計とあ
べ獻撃ゆとあり。豊嶋煉馬の滅亡ハ小とのそ大ふ仕へ。寡とのそ衆ふ敵ーる。衍恐ゆと
爭何いせん且和君ハ俺身と共ふ里見殿ふ宿因ありそ。安房へまあり。仕ふ。約束あ原我
忘れと狡徒舊君の與ふのそ。その身と殺ぞとふ。義ふ錯ふ。誰ぞ感恩ゆあ
らん。又三省ふのへかと密安ふ諫めーべ。道節心ふ狡ぞ沈吟ゆと半晌許頭と抬げ
歎息ーと和殿の意見もその理あり。俺ハふく里見殿の恩遇と忘れ。あれども人とく。

道芳

始めありて終りなくは大丈夫とぞ〜〜ぶ曩に某白井を寇家定正を殺す漏せり折還て敵に駈
逐ま惱されて和殿們さへ難義に及べりそと那依に思へ始めありて終りなく做と
あるとせばこそ是大丈夫の所為なんやと思へども今速に寇家を殺すとなほ虚実を覘
時と候て折もあらば一笠前射ん時至らば天の命その期に臨び絶んのみ然まで劬労に
あまと答て再這度とのぶ信乃の隱しと密に五十子に赴て城の虚実を覘ひけり左右
を程に十一月の中氣に至り有一日甲斐の石木の指月院より現八大角が脚力にて去歳の
冬照文が那寺に送り措る安房の雑兵二両名氷垣夏彦の宿所に来て現八大角に連署の
状を取出て低と報らぶ信乃道節に遽く件の書翰を受合て使役に労ひ留措て
退て其の書を見るに現八と大角に指月院に到着せ日〻大法師に面謁て信乃道節に
再會あるる其身那身の来路に送もれく報知て壮介のを同事せに犬川生に往ば夏
六月の下浣犬田小文五と連立て越路よりかの来つれども目今い寺内に在らじ其の故に箇

様〻〻と小文五ぶ犬の顛末大阪毛野潔智のを壮介小文五ぶ跳後を萬死を出く
一生とぶ〻と〻ぶ猝の趣毛野も亦同因果の大士と分明を智字の王と痣もあるを毛
野ぶ石濱光親胞兄弟の仇ぶ馬加常武一家のを慶金ぶあるを又信濃を千葉
大石家の佞臣们を撃ぶ〻不又寇家縁連を殺す果さと思ふ青柳の歌店あく
詩歌を送を立去る支も漏さ低と〻大法師の説示せを隨る書はを綴く
これより犬川犬田毛野ぶ心とを〻不又自餘の大士を求ひて遇ぎも這度快本
院ぶかの来れ春まで過ぎ〻〻〻〻〻〻〻是年の暮ぶ音信あらん權旦逗留
あ〻と〻大法師の宣まを先のよを消息を報まるるのと最も細く寫こ
ければ信乃道節ぶ迭代を讀て俱を歎びて低れば非如遲くとも明年の春までぶを犬川
犬田もかの来て四大士這里を来會せ然るとぶ毛野親兵衛の二大士も亦會よりあ〻大終ぶ
具足せん日を慢て候べのをあらばれども龍ぶ往とを〻窮泥難義を遇ざる

ある。就中小文吾は相模灘の破船石濱の危難越後庄員の大泥は荘介と倶に萬死を出で実に一生と得がたきその典を単節はいふもいとけん不便なり又那犬阪毛野と来うんは智勇愉快の壮士と単身あまた大敵と麾かせーとふ兵法武畧浅からの勇士の及ぶ所ふあらざるべし又残る一個の仇と索ん與る小文吾們ふ従ざるーも思慮深く胆勇獨歩とのひつべきいろいろ件の雑兵を召のぞーー對面して猶且辯の仔細を問ふ那雑兵們ぐ答ての曰く。指月院の後住あるも望むものいで来りければ、大大徳の欺びぬこで来春八寺と遞與く酒家ふ俺投かさ宜べ。汝達い穂北より路の便りの云くれば安房へ還りて照文ふ七犬士のるく告よ這它の事い書中ふありとく。蜜崎主人與くせふ法翰と遞ちされる是なの一説もふ入ん回翰と賜ふ及ばず安房へ御要もいば兼らんとのひけるを信乃道節いちち听て然ぐふ俺們も言傳と憑むと時のまぐ至らぎーと守ふ拝見せざるとのく蜜崎生へ書状とあらば這我もあるべーと可寧ふ意衷を示ーと二封の銀子と取せり。

文溪堂蔵

偖り一程ふ夏行有種い荘介毛野小文吾們の事偖ーと駭嘆ーー且欺びて指月院より来つる雑兵ふ飯と喰せ酒を飲ーと牽生物さへ與へければ雑兵們い受欺びぬ。その夜ぐ這里ふ暁ーく辞ーと安房へ還りける是ふより信乃道節い現へと大角が荘介小文吾我相伴ーかく来る日と俟不樂て嗜すをーく弥る日の今茲い必友ふ果敢ぬく甘有て明ぬ文明十五年の春月寒ぬ正月の十日あまりふりけり。話分両頭這時石禾ぬ指月院実現八大角寓居ーと荘介小文吾と俟くるふ。年い莫暮れ春立ぬれと那二大士かく来ぎ折ーく後住の老僧の入院も既ふ近ふ来りぬ、大法師ふ吉又ヨヌられば現へ大角い身と措難て且穂北へ還らん欺偖ても這里まあるべ欺ぬと。ぬ欺ぬ難く在りける程ふ正月の十日ぬ荘介と小文吾ふ又信濃路より来ふければ迭の欺び驚くまでふもの宵ふ、大も囲居ふ入ーく四大士い各々来路と報げ。意衷と演ー。孤燈の竭んと寄とおぼ。ぬ登時、大法師のふ。星裏ふ拙僧本院ふ權且寄宿あつる折住持の老僧遷化ーと寺と預るのもーく且その

送囑の默止かたきを憶ぢ這里ふ錫を住めそ似而非住持ふるつたるを是已とそゐる所
為へ然るとやう登く讓るべし後住の法師あるとそ入院の日近つくらいまゝその日を
卜めねども下旬ろ〳〵と呼ぶ侍れば毎寺遍与ち拙僧い當所を辞し去り結城の故
戦場ふ赴く權且那首ふ住んと欲もその故ふ拙僧出家の初より那八顆の靈玉を往
方を索極んの與ふ科藪行脚ま二十餘年の星霜を歴されも菩提の勤如意ろ〻を
塵中ま在るふ似ろ方僅一も八顆の玉の往方を安定ふ知るよりあるそを感得せ八犬士の
出世姓名送もろく少知るとをゐるーるべ稍宿念と果ま足れり。そを内中ま大江大阪の
往方詳ろうねども時至らば索めぎ七竟ふ来會ま之とあらんをそを拙僧ハ結城の故
戦場ふ庵を締びて義実朝臣の幼先考里見大炊介季基朝臣并ま大塚匠作三
戒祖父井円二秀直外祖父這它士嘉吉ふ戦死ろ名將勇士勁卒の菩提の為ふ一
百日ふ大念佛と修行七罪犯赦免の君恩ふ答まらんとそ呼れ去向の便り及〻ねば穂北の

旅舍ふ立寄て大塚大山二賢者ふ面會し七結城ふ到らん各位もその折ま逗留し
拙僧と俱ふ當所を立まりのとふを莊介ち听ろ〻ん来一旬ま暇ま身ふ成りふ
なる。鄙ふ某道節と本院ふあり一日ハ幾程もろく他鄙へ走そ蓑生ろの它ま日光山ま天地と
一ヶ所も登陟せぎ大江の小兒ハ神隱しまく往方もろくばれりーとハハ某諸州を巡りし折
山ふ遇へば必登り七那親兵衛と索ま之ろ他恙もろく存るるハ今茲ハ九才ふ成り侯と
殊ふ山ヲヲ多ふ這地の灵場名山と漏さが送憾しかんん後住の入院ある日ま七某们ち當
国の高山峯ふ登りて親兵衛と索ま之て〻ま之かつの来て大飼大田大村生ハ這義ふ從ハ
今とハハ現八小文吾大角一説ふ及ば皆點頭てそハ俺们も同意へ豆の旦開ま立出く
二十日前後ふかの来べ。さが大德ハ是答のまと允させのふ欲ハ〻ふ〻と問へ〻大ハ微笑て
そハ左も右も隨意ろべ。快哉て快還りのとハふ大家欲ば〻その詰旦莊介現八小文
吾大角们の四大士ハ身杜衣一七ま時非如他山ハ漏ま也ま先蓑生へと去向と定ぬ

立てハそだけり。去程に後住の入院ハ下旬ハ障る事有とて。四犬士の出立ぬる次の日に議定せられて才に中一日隔てはやく入院をすまされけり登時。大ハ兼て豫の約束岩黠して後住に寺を遞与せしに那四犬士の還るを俟ずして身ハ本院に在んも今ハ愛惜なるに似て影護所あれバとて當所を退去て穂北に到りて四犬士を俟ばやと尋思をするに都念成と錢義六に。那四犬士が帰来なバ懲可に入院を急れて後住に寺を遞與せしハ酒家ハ當所を退きて穂北に到りて俟バ在らんとものかたりを傳へよかし。這義を忘るべからずと叮嚀にすかしをおき後住に法師に別を告て。准備の頭陀袋を頂に掛け戒刀を懐にして脚絆を穿檜笠を戴き錫杖を突鳴して飄然として立去りける。然而、大ハ石禾を走りて夜ハ宿り昼ハ歩みて則一日ならず武藏州豊嶋郡麻生の郷に程遠からぬ葵岡といふ一村落を過る折春の日既に傾きて下晡に及しかバ宿を請んと思ひつゝ村人の門に立よりて云云と呼内に當所ハ村の法度にて出家に宿を借さずといふをもいとみへぬかべ強てこそんとすべきに又その先なる家に到りて云云と呼門に這

家も兼て約莫かくの如くなりと五六軒なるをしもあれ。大ハいよゝ訝りて強顔く答て又その戸の家主に喚いけて老禾這村の家毎に宿を投る事既に五六軒に及びしがと推辞るも皆異なるなれバ單身逆旅の故あらば凡俗なれバ然もあらめ酒家ハ出家なるに且抖藪行脚の身を柱て一宿を暁させんと憑めバ主人ハ洗ぐ手に身を起して端近く出てゝ大かたち對ひて長老知ざる所あり俺村ハ年毎に東西の没る事ヨヌれバ村長より宿らして法施宿をせざる事とぞ。大かたちに聴いて然ハ所以もあるべし然れバ生僧で留ぬ事によりて頭陀の身あれバ路費ヨヌくなくて得ねバ房錢ハ舊製度目の如く人並にならせん。疾ても兼ていへども左右を向せる果ハ家主が頭を左右に振て前房錢を賜るとも出家を宿所に留る事を捉らるる村長の法度を今ハ背がたし快く出て給へと固辞むを、大ハ又訝りて何故に甚く麻なる所以あるぞと問へバ主人ハ舌うち鳴らして嗚呼情剛し然まで疑ひ給説示さん椢に尻をかけて聽ねかし。今より五六年前の首夏當所に水損ての患

こゝに本邨の大沼より間なく時ならず雲霧起りて屢大雨と降せしが五穀登らぬ雷より
蛙と生ずるまでふるうて介バ村人ら歎て鎮守の神社に祈禱凉しく七日の神樂を献
ぜ鉦を鳴らし鼓を鳴らして連ねて請晴を催めるに此も応験なくして一日行脚の法
師あり名づけて知雨老師と名告て村の戸毎に論るやう今茲は隣郷豊年なるに本村な
のに水損あるは何ぞ招く孽なれ神の崇のあるを知らぬか抑本村は大沼の昔より
あらぬ神あり祭れば慈悲廣大なれど自村他郷の差別なく貧民を憐みの大誓願をい
ませるを汝逆夢も知らぬまでに日火を祀て鎮守の神をのみ崇る故に怪る崇あり今より衍
改めて咱教に従へ憂を轉じて歓びとなさんと躍て旋せよ速なるべし怪しむ惑を醒して
件の神を祭らぬ村人総て餓死ぬべしと怕るべきやと鼻春蟻めいて示されば
人食吟て驚き怕れ〻〻ばいろ〻の祭祀をなして崇を鎮めんと宜請問凶ぜしかど
老師の論めまう件の神の祭祀吹鼓舞踊る支度とぞ〻〻約莫年は正月ぬ永

樂錢五十貫文を分ちて五人の法蒲簀に斂め新衣十襲を分ちて五人の皮笠に斂め
藻刈船にて乘七沼の中央に流せば夏は又畑物の瓜茄子何これとなく初生を十人に
笠に斂めて流せと前ぶれせよ秋は又新穀の精白米二十苞に味噌醤酒二十樽を相
添て流せと前ぶれせよ這祭礼は年に一番供物に増減なくて正五九月に與約せば縱
鄰郷の凶年なるも本村は年毎に五穀登りて豊饒なるべし怠慢なく叮寧に教
ゆべし大家疑訝りて仰ぎ見べきも然でも村の東西没するに勿論神のなれば供物の
錢米衣服は後に誰に取ぬと問ふに老師は涉り知る愚なるとなるべかる那神慮納ある
べし供物は通て夜中に何処にもなく喪るとなるべし不思議なるかなと
いへ神は口実なりて形なしと呼て然しも凡夫のまゝなる錢米衣を受收めて何為にか
のゝしんといへば老師は冷笑して浅ましき凡夫の了簡なり件の神は貧民を救せた
ぬの大慈悲なりて凡夫のまゝなる錢米を受ぬ自村他郷の差別なく貧者に

授けぬと人よくこれを知るとなり。さるを汝逆ぶ夏作秋作野菜の類をかのくま倍て價貴く賣く國の三ヶ所を折々あらい那神の授さ給ぬ這度を査しと疑ふとなく村人心一致して錢を半米を裏め三番の供物ハ懈怠なくハ五穀熟して病厄なく敏智他郷を優るべし。但那神ハ外より来る法師と巫覡を忌めば一夕も留むべからず又那供物ハその月の十五日と相定め夜分の時ハ船を乗して沼の中央まで推遣らば此の後ハ安快なる宿所ハ得て如ぬ門ハ出べらず。當夜ハ家毎に灯を点さず門を鎖して謹慎べし。祭祀ハ正五九月これなり。今茲ハ月ハ拘らず這六月より奥約して正月五月二度の供物を今番一度ハ為せよ。等閑ハ為ぬと神託ハ消て去りけり。あるを未曾有の奇変なれば村人駭嘆せざるハなく信ぜるもあり信ぬもあり。狐狸の所為ならんと不覚ハ怕れて妖されるを嘲ハ多かりけれ。評議商量區々なるに二十餘日を過せども天一日も乖ずと雖ども剰十五六なる少女子の往方もなきまでなりて西三番ハ及びしかば村人総て駭嘆ひく然らば那知両老

師の教誨の如くせんとやうく錢を集め東西を整へ大沼祭祀を約しかハ後ハ女子も亡せざ天もやう強く晴亘りく秋ハ至りて半減の実入りあり是ハ後年毎に三度の供物を闕と雖くけハ正月の祭礼日ハ今宵錢五十貫を新衣十襲を大沼ハ投ぬ船ハ無しと備ふ是ハ其の東西ハ村長の宿所へ集くめ給へるれば咱們ハ錢を出せしの四鼓より戸鎖くれば寝るか怎ぞ情由ぞいへ出家ハ決して留めず外ハ宿を投めるひ這村老ハ無しと忘れて長閑紀田舎児の甘春るも厭ぬ長物語ハ大ハ呆れて島許ハ然ぬ為ぬ領ぬ所謂を叮ぬ推辞ると今ハ整理ハ思ぬ抑這里の村長刀祢の姓名ハ何と仰ぬ宿所ハ何処ぞと問ば主人ハ直実ぬ然べ這里の村長ハ般若井右衛門と呼れる宿所ハ畷を東へゆくと約ハ三町許ハ南ハ面する衡門ハ長刀祢の屋舗ぬ又只投宿の所望ぬ為ぬ盃を乞ハ其ハ峠村まで急ぎぬ為とのハ、大ハ応ぬて別を告て遽く走去りぬ那村人ハ云云と説知る大沼祭の供物の多を信られぬを必幻術ハ長ぬるものハ村人ハ戯哄

なく東西を奪ふなるらん。なりとも是等のなるを。明々地に諭しなば素より愚直の田舍兒の。還て洒家を欝悒く思ひて懟ひなく醒ざるべし。要こそあれと肚裏に尋思をなして忽地に。その計決りければ寄る隨に村長の宿所に赴て喚門て。執接の老僕にかなう愚僧は早晨まで村人に大沼祭祀を教ゑし。知雨老師の徒弟也。知風道人と喚るゝなり。則師父の幹人として一大事を告ん為に。今宵猛可に来つるかし。主人に通達あれかしと。いふに老僕は胆を潰して敬ふこと大方ならず。且く等せ給へとて。走りて奥へ退りけり。折から點燭時候なれば村長盤若井右衛門二郎は。よしと聞て遽しく。奴婢們を召て客房へ燭奴二脚ともさし出しつ。布袴の紐結びもあへず。みづから門邊に出迎へ。大法師にうち對ひて在下主人右衛門二郎誘方へと先に立て客房へ案内をせり。登時ゝ大は草鞋を脱て。引きて上坐に着しかば。右衛門二郎は額づき拝みて老師の塵俗を忘れ給ひて御弟子を差されしと有がたさ甚し。法體恙なしはさまでや願ふは慈教の趣を傳へさせ給へかしといふに、大は爪繰る數珠を。

止めて法衣の袖掻合し。老師の法教餘の事にあらず。只裏に教諭せずとて大沼の供物なにぞや等閑なく今宵は正月の祭祀を執行せらるゝこそ感心浅からね。なつる昨日沼の神の俺師父に託宣あり。近曽不思議の妖賊ありて。村人們の献供物を竊略ることありしがそれはとられはあく先へども那癖者の術長たれば神なりとも立地に罪なからんと最かくろ願ふなる老師俺與に退治せよと宣ひて因て拙僧師命を禀て這里に到来なりつるなり。今宵那沼の頭に赴て終宵四下に心を屬て癖者あらんとすなれば討滅さん為ぞかし。這義をなてらるゝのみねといふに右衛門二郎は駭呆れて。そを只入りけるも言彌事を問ふべし。大徳はその癖者を法術もて退けぬか或は亦劍戟をもて擊平げぬかと問ふを。大は呵々と笑ひて。拙僧法術ありといへどもかくのごとき癖者は鐵炮をもて擊捕るべし。本郷に獵戸の銃術に修煉ある剛の者あるやと問復されて。さればこの本郷の獵戸に種平嶋平と喚做す兩個の獵夫あり。その心ざま勇悍くして百發百中の手煆煉なり他們を用ひ給へかしといふに、大は頷

ぞ。現その二人ようゐれ。今宵時刻及ぶ各々い例のごく。供物を大沼ゐのそ由ゑく。船ゐ
乗りて退くと約二三町ゐ〜く。路の樹間ゐ伏駅れ其首ゆく暗踊と等ゆへり。鐵炮の
音ゆゑ〜。九鳴の老さん由大家を奪く支ろ来く。綽の容子を親ゆか。勿論心ざゆ虚弱
わく。鬼胎を抱く嗚呼の者或いその性噪〜く。支ゐ忍び由白徒い今宵件の隙を省ゆて
但壮健ゆ。壮容四五名和主と倶ゐ留りてその它のゆい返ゑ〜。支成るまぐい推秘〜く。
叩ゐ人を知〜ま〜ゆ。この美を慎ゆこのか。とゆへ右ゑつ三額をつゑて仰ゐけゆ由徒亶
さえい恐けれども大沼を鎮りまゑい人の與る禍福を降〜く。賞罰訓殊を灼然ゆ。暴神と
こそ思へいひゐ何ゆ〜その妖賊を怕れ〜師父を労ゆまぐゐ是笞の託宣ゆ〜ゆ〜ゆを
〜、大を冷笑ひ〜ゆゑ唐山戦国の時楚の大夫屈原い汨羅ゐ投ゆ〜神ゐ祭りゆの後ゐ
これを祭るゆのゆ。五月五日ゐ供物を備〜その水中ゐまゐ〜ゆ〜ゐ屈原の神を夢ゆゑ。
祭らゆ〜と甚よ。然けれども祭祀の供物い蛟龍の為ゐ奪れ〜。奈何ともせん粥ゐ。願

ふい五彩の糸をゆく。結びて水ゐ沈めよゐ。然るとゐい件の蛟龍ゆ怕ゆ〜あれを奪ゆゆゆる
るゆ〜びこの美を憑むとゐれ〜ゆ則五彩の粽を制裁り〜。形のごゆゐ祭り〜とゐ。端午の粽
即是ゆ。慣る例もあるゐれど。沼の白蛇神をとても妖賊を憚り〜。託宣ゆ〜ゆ疑べゐゐ。快
快准備をゆゐゐ。と言ゆれ右ゑつ二ゐ只顧ゐ〜ゆ感激〜。遂ゐ此も疑ゐゆ先、
大ゐ茶を看め。夕饌を羞めるゆを曾待極め〜叮寧ゆゆの間ゐ右ゑつ二ゐ猶戸種平嶋
平を召来〜。密談を示ゐゐゐ〜。竊ゐ准備をゐ〜ゐける春の夜既ゐ深初〜ゐ。
夫の初刻ゐゐ〜ゐ祭祀ゐ関る故老村の壮佼幾名狩村長右ゑつ二の宿所ゐ聚
来〜。五蒲箕の銭二皮笹の衣裳を五疋の馬ゐうち駆〜。大沼の畔ゐゆく
程ゐ蕉火二行ゐ道ゐ〜ゐ中領のゐ〜。乱雑を制め清浄を旨とゐ。犯〜穢を
正と許さゆ。右ゑつ二ゐ麻の社衣ゐ五人服章ある黒綿布の衣を被〜。藤柄の中刀城。
瑞短ゐ横佩〜。一分反の菅笠を戴ゐ。斑竹の杖を衝ゐ〜。伴當一名を従へ〜。陸續と

○文溪堂藏

○文溪堂藏

徐ろに。約莫這祭祀に関るのハ皆新衣を被て。剪綵を挿頭に。あれとも鉦鼓を用ひ。人の想ふと許さべ。略次の煩ひなりけり。偖而件の衆人ハ大沼の畔に馬を駐ゆく。蒲簀と皮笠とを卸し。准備の藻刈舟に積無しけれ。祓宣代る一個の故老。布の白袴を穿て菅草を採神に採撫てゆふ鈴を振鳴し。沼に向て跪て。中臣の祝詞を声高に許しゆふ誦ると一遍白幣を彼此と振動し。うち戴て躍て水際に建ると。大家齊一に身を起して。素裝時分ハ今なるを。快哉舟を推出せと。罵りつ散動めて。笠高く把るの一両名。舟を沼の中央へ撑めて流し。咄と嘆て。蕉火いそぐ伏に沼に投。垂木五尺の馬を。牽走り。異口同音に後を追ると相警ても。喘々て逃るが似く。別て宿所へ還りけり。そが中に右馬二八故老。両三名と。心利く小廝力あり。村の壮客六七名に。大の機密を箇様々々と。甲夜に耳に示せしかば。逆らふ者なしと。沼に向て。宿所までかへりも去らぬ。途より竊に引外し。右馬二に従ひて。沼を距ること一町あまり。樹林の間に伏躲れて。那種平ら。鐵炮を放てあらぶ

雫漏さじと。呼べ俱に耳を澄して。今かと待うけ。小程に。大法師を。鶴戸種平嶋平を。竊に招き近つけて。件の機密を説示す。種平ら異議もなく。躍て宿所を走還りて。身装して。鐵炮を引提て再出て来て。盤石井の宿所に躲まりて。既に村人ら。祭祀の供物を沼の畔に出て遺の過しなく。大も徐に立出て。草鞋を穿て錫杖を挾み。種平嶋平を従へて。間道より找て近づき。村人ら祭果て。齊一かへの去り志時、大き竊に立替りて。且這沼の光景を視るに。昔に倍て大沼の周囲ハ五六町あまり。八九町ばかりやあらん。水際に荒草菖蒲の枯て。夏ハ水菜もヨスイとかへ村の字を葵岡と。唱へるハ。これに縁る歟とかりて。時氣ハ正月の望の宵。月明に星稀に。風いと寒く。霜深く。氷を摧く水鳥の。立ち遠く向上せバ。西に赤坂青山に降置く。霜の真白なる。目黒に落る鴈ら。立音も。黄なる。朽くる。高塚。鬱悒くや。岸に夜視ぐら。五色もよや。四方天南ハ麻生高瞰芝浦近く。寄る波を東へ

續く入江潟九ハ芝崎神田の代山漁邨樵徑相雜ひて目ふ見ゆるあり兄弟あり征客常ふ腸を断べらける眺望之當下、大ハ沼の地理と進退さへふ鑒定めて両個の穢戸共侶ふ小篠の蔭ふ身を潛めて那癖者が米噛やと息を凝して覘ふ程ふ夜ハ丑三とおぼしき比麻生の方より忽然と癖者五名連立て来て沼の畔ふ立在て居そゞ中ふ一個の癖者ハ阜頭巾を目窓ふ戴き長刀を横へて居る頭領ハ賊ふ向ひ送ふ指さして其所ふて下と云へば癖者が腰ふ附ける鈎索を船ふ投掛て引寄せて無て蒲簀の銭を引抗て肩ふ乗せんとせし処を寛澄せし種平嶋平倶ふ敬ふる鐵炮の火蓋を撞と切て發せば寛澄差ぬ那頭領と船ふ一個の癖者の乳の下腋下此彼ひとあく撃ふ傷られて両銃丸ふ雷発時も沼堪ぬ苦と叫びて足を張て仆れけり畢竟、大が智計也。這癖者們を撃ふ仆なる後の話説甚麼ぞや又這次の巻ふ解分ると聴れ。

里見八犬傳第八輯巻之六終